神奈川県立博物館発掘調査報告書

第 15 号

師 岡 遺 跡 (2)

REPORT ON THE ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
BY KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

No. 15

MOROOKA(2)

神 奈 川 県 立 博 物 館
KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

Nakaku Yokohama Japan

1 9 8 3

師岡遺跡（師岡貝塚）発掘調査報告(2)

本　文　目　次

Ⅰ．師岡貝塚第２次調査 …… 1

Ⅱ．調　査　概　要

1．調査区域 …… 2
2．各トレンチの状態
(1) ０ＡＢトレンチ …… 2
(2) ５・６Ｆトレンチ …… 4
(3) ＧＳトレンチ …… 6
3．出土遺物
(1) 土　器 …… 7
(2) 石　器 …… 9
(3) 土製品 …… 10
(4) 貝製品 …… 11

Ⅲ．調　査　所　見 …… 11

表　目　次

表１．第２次調査発掘地域出土貝類
（０ＡＢトレンチ混土貝層、５・６Ｆトレンチ混土貝層） …… 13
表２．第２次調査トレンチ別遺物出土表
（土器を除く） …… 14

挿　図　目　次

第１図．師岡貝塚所在地点および周辺旧地形図 …… 15
第２図．調査区域実測図 …… 17
第３図．０ＡＢトレンチ壁面実測図 …… 19
第４図．５・６Ｆトレンチ壁面実測図 …… 21
第５図．ＧＳトレンチ壁面実測図 …… 21
第６図．土器拓本 (1) ０ＡＢトレンチ出土 …… 23
第７図．土器拓本 (2) ０ＡＢトレンチおよび５・６Ｆトレンチ出土 … 25

図　版　目　次

図版１．(1) ０ＡＢトレンチ北壁断面
(2) ０ＡＢトレンチ東壁・南壁断面
図版２．(1) ０ＡＢトレンチ混土貝層（東壁部分）断面
(2) ＧＳトレンチ西壁・北壁断面

図版3．(1)　5・6Fトレンチ西壁断面
(2)　5・6Fトレンチ北壁断面
図版4．(1)　5・6Fトレンチ第Ⅲ層出土土器
(2)　同上出土状態
図版5．土器　(1)　0ABトレンチ出土
図版6．土器　(2)　5・6Fトレンチ出土
図版7　石器・土製品・貝製品

調査主催者	神奈川県立博物館館長　田中雅夫
調査期日	昭和56年3月
発掘担当者	神奈川県立博物館専門学芸員　神澤勇一
報告書執筆	神澤勇一（Ⅰ、Ⅱ－1・2、Ⅲ） 川口徳治朗（Ⅱ－3）

Ⅰ．師岡貝塚第２次調査

師岡貝塚(横浜市港北区師岡町1137番地所在)は、鶴見川流域に著しい縄文時代前期貝塚群中の一貝塚で、同地域では例の比較的少い斜面貝塚として早くから知られている。しかしながら、貝塚の正確な時期、規模、構造等は従来ほとんど不明の状態であり、いっぽう近年急速な市街地化が進行し、将来その実態を把握することが不可能になる恐れが強まった。こうした事態により、本館では地域研究活動の一環として、昭和54年度に発掘調査を実施した。結果の概要は既に「神奈川県立博物館発掘調査報告書」第13号・第14号で報告したが、要約すると次のとおりである。

(1) 師岡貝塚は標高42.6m、現平坦面との比高約30～32mの低平な台地東斜面の褶状凹所に位置する。

(2) 平面規模は、東西約20m、南北約15m以上と推定される。

(3) 貝塚の主体は縄文時代前期（諸磯ｂ期）の貝層であるが、斜面下方においてはその上に中期（勝坂期）の貝塚が複合堆積する。

(4) いずれの貝層も、ほとんど混土貝層の状態で、部分的に純貝層に近い状態を示す個所が存在した。

(5) 貝層および土層中に、本地域本来の土器のほか、南関東東部の土器、またはその模倣や影響をうけた土器が少なからず混在する。

(6) 貝層下土層中より、早期(田戸式土器)、前期（黒浜式土器～関山式土器？）が出土、遺跡の上限が早期まで遡る。

調査結果は当初の予想を上回わるものであり、細部について更に調査を実施する必要が生じた。しかし、貝塚部分は急斜面をなし土砂崩落の可能性が多く、下方の市道と密集した住宅群に被害を及ぼす危険が予想され、大規模な調査は全く不可能の状態にある。こうした事情により今回の第２次発掘調査は、前回の一部発掘未了個所（これについては、説明の都合上、既刊の13号・14号で一括報告した）と第１次調査に関する必要最小限の補充を目的とするに止めざるを得なかった。

調査結果の概要はⅡ章以下のとおりである。なお、本報告書では師岡貝塚周辺の環境説明のため、原地形を伺い得る「大日本帝国陸地測量部の20,000分１地形図――明治41年版」の一部を採録した。貝塚の位置は北および東からの矢印の交点に当たる(第１図)。

記載形式、発掘調査区域および図・図版の表示法は前回の調査報告書に準じることにした。ただし、各調査トレンチの層序名称と土器分類名称(型式名)は、独自に与えた。したがって、第１次調査のそれとは異なるため、P.11、P.９に対照表を挙げた。

Ⅱ．調査概要

1．調査区域

第１次調査においては、貝殻の分布密度が比較的高い東西10m、南北14mの範囲に調査区域を設定し、２m方眼で35区画に区分した。原点は調査区域北西角で、台地上面に存在する三角点(42.61m)よりN――56°――E・距離29mの位置である。各区の名称は、原点から南を数字(１～５)、東をアルファベット順(A～G)の記号で分割し、両者を組み合わせて表示し、トレンチ名にも使用した。今回の調査においても、調査区域と各区の名称はそれを踏襲したが、前期・中期の貝層が先に設定した区域外に広がっていることが判明したため、それらの末端を把握する目的で、南北線上に６、０、Ｓの３区を増設した。発掘個所は０ＡＢ、５･６Ｆ(西半)、ＧＳの合計16㎡である(第２図)。

なお、前記３トレンチの以外に４・５Ａ区を発掘する予定であったが、下草の根を除去した段階で直ちに関東ローム層（硬質部）が露出、他の土層の堆積・貝殻の混入・遺構は全く認められなかったので中止した。この個所は台地上縁に接しており、かつて上面が削平されたさい原状が完全に失なわれたと考えられ、ほかに特記すべき所見が無いので説明を省略する。

2．各トレンチの状態

(1) ０ＡＢトレンチ（第３図．図版１）

０ＡＢトレンチの位置は２ＡＢトレンチの北２m、貝塚の中心部が存在する褶状凹所の北側上端に当たる。本トレンチでは第３図に示したように地表面が東南方へかなり傾斜し、表土以下の各層も同方向に向けて堆積を増し、また、東側の傾斜角は約30°を示す。層序は上から次の５層に分類できる。(1)表土層(腐植土層)、(2)混貝土層、(3)混土貝層、(4)暗褐色土層、(5)関東ローム層。各層の状態は次のとおりであった。

表土層――第３図Ⅰ層――

有機物を含む褐色土層。Ａ区西半で50cm前後堆積するが、Ｂ区で急に厚さを減じ、東端では10cm内外となる。堆積が薄くなるＢ区付近は、２Ｃ区付近で横に伸びる、狭いテラス状平坦個所の延長部分であるとみて誤りなかろう。本層では明らかに二次的に混入した貝殻の小破片が散慢に出土するのみで、遺物・遺構は存在しなかった。

混貝土層――第３図Ⅱ層――

有機物が多く混入した黒褐色土層で、貝殻の小片を含む。本層の堆積はＡ区とＢ区の境界付近から出現、Ｂ区東端側と褶状凹所側へ堆積を増し、最も厚い部分で厚さ35～40cmをはかる。しかし、本層の上半は全体に密度が低く粗雑な状態を示し、自然崩落にその他により原状が乱

れたと考えられる。したがって、下半部と分離して扱うのが妥当かも知れないが、明確な分離基準を見出し難いため、便宜上一括した。

Ⅱ層出土遺物は動物遺存体、人工遺物とも乏しい。前者のうち貝類については、ハイガイ、サルボウ、ハマグリ、カガミガイ等の存在が目立つ程度にすぎず、また貝類の大部分は小片で、他の種類の存否は不詳である。

人工遺物としては土器小破片十数片と貝刃が出土した。土器は主にⅡ層下半部から出土。すべて後述する第1類土器（諸磯b式土器）に限られるので、本層の時期は一応諸磯b期と考えてよかろう。貝刃2点は、いずれも中型のハマグリ製である（図版7——253・254）。

混土貝層—— 第3図Ⅲ層——

黒色炭化物を含む暗褐色土が混った混土貝層。Ⅱ層とほとんど重なる形でB区西端付近から現れ、東壁側と褶状凹所側へ厚さを増し、20～40cm堆積する。本層を形成する貝殻の遺存状態は比較的良好で、破砕が少ない。B区の一部では純貝層に近い小ブロックが認められたが、堆積はほぼ均質で、土層も良く緊り、B区南半部の1層からⅣ層に達する小撹乱個所と層の上下両面に多少凹凸が認められるが、全体に安定した状態を示す。

Ⅲ層出土遺物は、貝類を除く動物遺存体、人工遺物ともにきわめて少い。

貝の種類は表2に示したように、二枚貝＝ハイガイ、サルボウ、ハマグリ、アサリ、シオフキ、オキシジミ、カガミガイ、ミルクイ、カリガネエガイ、マガキ、イタボガキの11種、巻貝＝アカニシ、イボニシ、ツメタガイ、スガイ、イボキサゴ、ウミニナの計6種である。種類と数量は二枚貝が圧倒的に多く、特にハイガイ、ハマグリ、オキシジミが主体をなす。巻貝は小型のアカニシが僅かに目立った程度で、全体に占める割合も約10%にすぎない。鳥類、獣類は種別判定が不可能な微小骨片がごく微量出土した。貝層の体積と照合しても、鳥獣類はきわめて少ないと言える。

人工遺物は土器破片のみで、第1類土器（諸磯b式土器）が主体をなし、Ⅲ層本来の土器と認められるが、Ⅳ層に接するⅢ層下面では、少数の第2類土器（黒浜式土器～関山式土器？）が散慢に出土した（第6図・7図、図版5）。

暗褐色土層——第3図Ⅳ層——

暗褐色を呈する粘質の土層。下半部ではかなり硬く緊る。また第Ⅴ層（関東ローム層）上面から10～20cmの間は関東ロームの粒子が混入、黄色味を帯びるが、漸移的に変化しているため区別し難く、かつ本質的相違が認められないので一括した。

本層は0ABトレンチ全体に存在、第Ⅱ層、第Ⅲ層と同様な傾斜をもって、40～70cmの厚さで堆積する。

出土遺物は土器破片のみである。それらはすべて第2類土器（黒浜式土器～関山式土器？）で、主にB区上半部から少数出土した。大型破片が多く、遺存状態も良好であった（図版5、第6図）。なお、A区西半部下位から僅か1片ながら第3類土器（茅山式土器）が出土したが、

他の遺物、遺構の存在は認められず、他地点から転落混在したものと考えられる（図版５、第７図――205）。

関東ローム層　　第３図Ⅴ層

本台地の土層の基盤をなす層。A区では上面がかなり凹凸をもつが、その原因は明らかでない。本層は東側へ30～45°、A区西壁では平均20°、B区東壁では35°傾斜している。なおB区東壁からC区にかかる個所は幾分平坦面をなしており、前回調査した２AB、２DEトレンチの間に存在した平坦面に相当するものと考えられる。

本層からは遺物は全く出土しなかった。

(2)　５・６Fトレンチ（図版３．第２図・第４図）

５・６Fトレンチは前期貝塚と第１次調査で存在が知られた中期貝塚の範囲確認の目的をもって設定した。

第２図調査区域設定図に見られるように、本トレンチは褶状凹所の南側斜面下方に当たる。地表面は２DEトレンチ部分と同様、幾分幅は狭いがテラス状の緩傾斜となっているが、東半部から５G、６G区以下にかけては一部に崖状の崩落個所が存在、また西側および南側は樹木の密生地帯にかかる。こうした状況のため排土処理場がないうえ、全面的掘り下げは相当の危険が予想されたので、止むをえず西半部１×４mの範囲を発掘するに止めた。また、５・６Fトレンチ周辺では地表面に微小な貝殻片が散在する程度であったが、発掘の結果、中期貝塚は褶状部分に向けて、急傾斜をもって堆積が急増することが判明した。しかし、前記の地形条件から完全な発掘を断念したことを付記する。

層序は上から次の４層に分類できる。(1)表土層（腐植土層）、(2)暗赤褐色土層、(3)混貝土層、(4)混土貝層

表土層　　第４図Ⅰ層――

有機物を多く含む褐色土層で、他区域のそれと著しい差はないが、植腐土の混入が多く、色調が多少黒みを帯びる。本層は表面より15～20cmの間に、破砕した貝殻の微小な断片が混入するが、それらは明らかに周辺から散乱したものであった。また５区西壁側では堆積が厚く、最大70cm前後を示し、多少落込み状を呈するが、原因は不明である。遺物は上半部において第１類土器（諸磯ｂ式土器）が、また、暗褐色土層（Ⅱ層）と混貝土層（Ⅲ層）の接する部位に、第１類土器と第４類土器（勝坂式土器）、第５類土器（阿玉台式土器）が混在状態で散慢に出土した。したがって、本層は本来、無遺物層とみて誤りない。

暗赤褐色土層――第４図Ⅱ層――

赤味の強い粘土質土層。壁面実測図のように６区では堆積が厚いが、５区では消滅し、５区・６区の境界付近において、混土貝層（Ⅳ層）が本層中に楔状に嵌入する。本層は上半部においては遺物の出土が少なかったが、地表面下50～60cm（レベル約37.5～36.0m）前後の深さに

大型土器破片が集中し、混土貝層（Ⅳ層）南端に接して勝坂式土器完形品１個体が横転状態で存在した(図版４)。なお、これ以下においては土器破片の出土は激減するので、或はⅡ層は前記のレベル付近を界に上下分かれる可能性があるが、土層自体には変化や他に根拠となるような形跡が認められないため、一応、一層に扱った。

出土遺物は、土器(完形土器１個体を含む破片)、石器、土製品がある。土器は第４類土器(勝坂式土器)・第５類(阿玉台式) に限定される。このうち主体をなすのは４類土器であるが５類土器も相当の数あり、明らかに混在状態を示した。また、両類の特徴を兼備した例も少なくない。石器は石斧５点、石錘２点、磨石１点である。

石斧はすべて打製石斧で、短冊形または撥形に近い形態のものである。石錘は扁平な円礫の両端に敲打による紐掛を設けたもの（図版７ ―― **250**)、磨石は楕円形で一部欠失している(図版７―― **247**)。

土器を除く遺物は種類、数量ともに少い。

混貝土層― 第４図Ⅲ層――

黒色有機物を含んだ暗褐色を呈する粘質土層で貝殻の混入が多く、層の緊りが若干軟弱なのと貝殻の包含も幾分少なく破砕片が目立つ他は第Ⅳ層と本質的な差はない。５区西壁では中心部で15～20cmの不規則的レンズ状堆積を示す。本層は東側へ急傾斜し、僅か１ｍを隔てた東壁（ただし、今回の発掘終了レベルまでの間）には現れないが、５区北壁では東側へ急傾斜し、末端の厚さは30cmを計り、さらに下方へ厚く堆積する傾向が認められる。

本層に包含された貝の種類、比率は後述する混土貝層（第Ⅳ層）と大差がない。二枚貝ではサルボウ、ハマグリ、オキシジミ、巻貝ではアカニシ、ツメタガイ、イボニシ等が主で、量的には巻貝が多い。二枚貝については破砕した小片も混るが、２ＤＥトレンチの混貝土層のそれよりも、遺存状態成育度が全体に良好と言える。貝類以外の動物遺存体は種別判定不能な小獣骨片若干が出土したにすぎない。

人工遺物は土器、石器、土製品。土器は第４類土器(勝坂式土器)・第５類土器（阿玉台式土器）の破片で、第４類土器が主体的である。両者は明らかに混在状態で出土した。石器は打製石斧７点、石錘１点でいずれも暗赤褐色土層出土例と差がない。土製品は土器破片に加工した土錘２点である(第７図――**251・252**)。

混土貝層―― 第３図Ⅳ層――

Ⅲ層のそれよりも黒色有機物の含有が多い暗黒褐色を呈する土砂が混った貝層。混貝土層と同様に５区と６区の境界付近から始まる。前述のように暗赤褐色土層中に楔状に嵌入、実測図の如く、東側および北側へ急傾斜をもって堆積、その状態からみて３Ｆ区～３Ｇ区付近の窪状凹所に向けて厚くなると考えられる。本層も中期の貝層で、土器は第４類土器(勝坂式土器)、第５類土器（阿玉台式土器）に限られる。中間部分が未発掘ではあるが、貝層の状態とレベルからみて、２ＤＥトレンチの第２混貝土層に相当、中期貝層の南側末端と一連のものと考えら

れる。

本層を構成する貝類の種別と出土量の傾向は表1のとおりで、種類は二枚貝が多数を占めるが、量的には巻貝が主体的で、特に大型のアカニシの出土が顕著であった。なお、貝類以外の動物遺存体は混貝土層の場合と同様きわめて乏しく、種別を判定できるものはない。人工遺物は土器破片のみであったが、発掘範囲が僅かであり、かつ貝層の末端に当たっていることに原因すると考えられる。

(3) GSトレンチ（図版2—(1)、第5図）

GSトレンチは褶状凹所下方における前期および中期貝塚の北側末端を確認する目的で設定した。

この部分における土層、貝層の状態は、地表面の形状と同様に、褶状凹所下方に向けて、かなり傾斜を示している。本トレンチの場合も、地形的制約から危険を避け、基盤をなす関東ローム層面までの発掘を断念せざるを得なかった。

層序は上から、(1)表土層、(2)混貝土層、(3)混土貝層に一応区分したものの、各層とも斜面上方から多数回にわたって崩落堆積した状態であった。加えて、特に著しい攪乱を受けている。

出土遺物は土器少量と、剝片石器状石器にすぎなかった。土器は前期および中期に属するものが各層から混出、各層とも主体をなす型式は確認できない。ただ混貝土層の場合のみ、第4類土器(勝坂式土器)、第5類土器(阿玉台式土器)の包含が幾分多く、小破片ながら比較的遺存状態が良いので、一応中期の層と見做して良いと考えられる。混土貝層中および混貝土層の貝類は、破砕した小片が多く、両層における種別構成の差は把握し難い。人工遺物も、土器以外には、混土貝層（第Ⅱ層）中から打製石斧3点、剝片石器1点、石器破片1点が出土しただけであった。

GSトレンチ各層は、それらの堆積状態からみて、いずれも上方から崩落した土砂、貝殻の二次的堆積と見做すべきものであるが、少なくとも、その斜面上方に貝塚縁辺（前期さらに中期貝塚？）が存在、若干北方へ広がっていることが明らかとなった。

3．人工遺物

各トレンチの出土遺物の総数量は、完形土器＝1、土器破片＝半箱（70×45×10cm大）約7箱分、石器＝5種22点、土製品＝1種2点、貝製品＝1種2点、合計26点。ほかに黒耀石剝片4点がある。発掘面積が狭いことにもよるが、遺物の出土量は少ない。0ABトレンチと5・6Fトレンチより出土したものが大部分であり、GSトレンチからは土器破片半箱約半個分と石器類5点が出土したのみである。

以下、遺物の記載については種類別に述べることにし、各種類の層位別出土例数はP.14「表2．第2次調査トレンチ別遺物出土表(土器を除く)」として別に記した。

(1) 土　器

発掘された土器のうち完形品は１個である。他は破片であるが、器形を察知するのに可能な大型のものも多く含まれている。土器破片の型式分類は形状、文様、胎土、製作手法の特徴により５類に大別出来る。

第１類土器（図版５・第６図――158～171、第７図――206～212）

口縁部から胴上半部にかけて半裁竹管により構成される文様帯をもつ一群。比較的幅広の平行線文と連続爪形文を主な文様とし、やや粗雑に施文されることで共通している。文様の全てを平行線文だけで行うもの、連続爪形文だけで行うもの、また双方を組み合わせたものがある。平行線文だけの場合は単節斜行縄文を地文にする例（160・161・210）が多く、連続爪形文だけの場合はヘラ磨きした器面に直接施文している例（165～171）が多い。組み合わせの場合は、口縁直下と胴上半部を数条の連続爪形文がめぐり、その間を斜行、波状、弧状木の葉状の平行線文で埋める（158・206）。しかし、これらの量の割合は低い。文様帯を細い粘土紐の貼付けで表わす浮線文土器（212）も少量認められる。粗い単節斜行縄文を地文とし、浮線上に細い斜めの刻目が連続して付けられている。本類の土器の器形は、波状口縁（169・171）や折返し口縁（207）が加わるが、外反平縁の深鉢形が一般的で、浮線文土器のみがキャリパー形を呈すると思われる。胎土中に繊維を含まないが、微量の雲母を混入した例がかなりある。全体に薄手で、堅緻な焼成を示し、色調は明褐色、褐色、暗褐色を呈する。

本類はＯＡＢトレンチでは混貝土層（Ⅱ層）と混土貝層（Ⅲ層）の主体をなす土器であるが、５・６Ｆトレンチにおいても暗赤褐色土層（Ⅱ層）・混貝土層（Ⅲ層）・混土貝層（Ⅳ層）の各層より少数出土した。部分的に諸磯ａ式土器の要素を有するところもあるが、上述の諸特徴により諸磯ｂ式土器に比定できよう。

第２類土器（図版５・第６図――172～186、第７図――187～204）

胎土中に多量の繊維を含み、器面に縄目文様を施した一群。口唇直下から胴上半部に文様帯が構成されるものと、構成されないものに大別できる。いずれの場合も縄文を地文にしている。文様帯は櫛歯状貝や半裁竹管貝による数条の直線文、鋸歯文、弧線文、波状文、蕨手文、コンパス文などを組み合わせて構成される。文様帯の構成されないものは、口唇部に小突起を付加して飾る例（187・191）がある。コンパス文は口唇直下に施こされる例（173・174）もあるが、胴部から底部近くに１～２列めぐる例（177・181・183・184）がかなりある。地文となる縄文は無節斜行縄文、単節斜行縄文、複節斜行縄文、異条羽状縄文、組紐回転文、撚糸圧痕文、網目状撚糸文と多彩で、２種類の原体を用いる例（177・184・193・202）も認められる。器形は外反平縁の深鉢形が普通であるが、内彎気味で筒形を呈する例（172）がある。底部は平底と上底が知られ、底面にも縄文の及ぶ例（184）がある。胎土中には多量の繊維を含むものの、土器の内面は丹念に研磨されており、器壁の保存状態は良い。外面の色調は黒褐色、暗褐色、茶褐

色、明褐色と変化に富むが、内面は明褐色を呈する例が多い。

本類は０ＡＢトレンチ暗褐色土層（Ⅳ層）の主体をなす土器である。量的にはそれほど多いと言えないが、本類の土器の特徴を察知するのに十分である。比較的単純な器形と文様の構成は関山式土器の新しい様相を示すものに比定できると言えよう。

第３類土器（図版５・第７図――**205**）

１例。胎土中に繊維を含む胴部破片。外面、内面に貝殻による粗い条痕文が認められるが、擦痕風でもある。外面は斜走し、内面は横走する。器面は凹凸があり、条痕文は整形の様をなしていない。第２類土器のように繊維を含みながらも堅緻な器壁を呈することはない。器壁は厚く、脆弱である。内面、外面ともに明褐色を呈する。

本土器は０ＡＢトレンチ暗褐色土層（Ⅳ層）より第２類土器に伴出した。文様、胎土、整形その他からみて、第２類土器とは明らかに異なり、茅山式土器に比定してよいと考える。

第４類土器（図版４――**221**、図版６　―**213～220、222～231**）

太い隆線による直線文と曲線文を主体にして、押引文、連続爪形文、連続刺突文、刻目文、沈線文を附随して構成される一群。口縁は外反や内彎の平縁が多いが、波状口縁の例(**219**)も少なからずある。口唇は部厚で面を有しており、上端に施文されることもある。隆線は口縁部や胴部の区画状文に用いられることが多く、押引文、連続爪形文、連続刺突文はこの隆線に沿って施文される。縄文は胴部に地文として施こされるが、単節斜行縄文の場合が圧倒的に多い。器形的には、壺形、筒形、深鉢形、浅鉢形などの破片が認められる。**221** は完形の深鉢形土器で、高さ26.5cmを計る。口縁部、胴上半部、胴下半部の３文様帯に分けられ、口唇部には４個の突起が環状把手を伴って対称の位置に付く。口縁部は三角状隆線文と渦巻状隆線文が交互にめぐり、これらの隆線文の上や周囲に、刻目文、連続爪形文、押引文が丹念に施こされる。胴上半部は下方に押引文が一条めぐるだけで、他に文様はない。器面に凹凸が目立ち、整形の程度は良くない。胴下半部は胴部をめぐる隆線と、連鎖状隆線とで区画状文を構成している。区画内は斜行沈線文で充填される。胴下半部のこの文様は、本土器に重厚感を与えている。本類は胎土中に砂粒や石英粒を含み、器壁は比較的厚い。色調は明褐色ないし暗褐色を呈するが、内面に黒褐色、茶褐色などの色むらがみられる。

本類は５・６Ｆトレンチ暗赤褐色土層（Ⅱ層）・混貝土層（Ⅲ層）・混土貝層（Ⅳ層）の各層より出土し、後述する第５類土器と混在した。本類の示す胎土や文様の構成上の特徴は、勝坂式土器のそれと一致している。

第５類土器（図版６　―**232～238**）

太い隆線による直線文と曲線文を中心とした文様構成は第４類土器と類似するが、胎土中に多量の雲母を含む点で異なる一群。口縁は大型の波状口縁や突起状口縁（**235**）の例がかなり目立つ。口唇部は厚手で、沈線文、連続刺突文、押引文を施文する例があるが、器壁は一般にそれほど厚くなく、堅緻な焼成を示すことが多い。隆線文とこれに伴なう押引文、連続爪形文、

連続刺突文の配し方は第４類土器のそれと共通している。しかしながら、有節状の押引文(**235**)や連続刺突文（**234・238**）の量が増す点に、顕著な差違が見いだせる。器形は外反平縁の深鉢形が普通で、これに浅鉢形（**238**）が加わる。胎土中には雲母の他に、砂粒や石英粒が混入される。色調は暗褐色ないしは明褐色を呈す。

本類は５・６Ｆトレンチ暗赤褐色土層（Ⅱ層）・混貝土層（Ⅲ層）より第４類土器と伴出したが、その量は少ない。前述のとおり、諸点で第４類土器に類似するところはあるが、器形、文様、胎土その他の特徴は、関東地方東部に分布の中心をもつ阿玉台式土器に比定されるべきものであろう。

以上１類～５類土器の概要について述べた。これらは比定される土器型式と出土層位との関係を整理すると次のようになる。

第１類土器＝諸磯ｂ式土器／０ＡＢトレンチ混貝土層（Ⅱ層）・混土貝層（Ⅲ層）、５・６Ｆトレンチ暗赤褐色土層（Ⅱ層）・混貝土層（Ⅲ層）・混土貝層（Ⅳ層）

第２類土器＝関山式土器／０ＡＢトレンチ暗褐色土層（Ⅳ層）

第３類土器＝茅山式土器／０ＡＢトレンチ暗褐色土層（Ⅳ層）

第４類土器＝勝坂式土器／５・６Ｆトレンチ暗赤褐色土層（Ⅱ層）・混貝土層（Ⅲ層）・混土貝層（Ⅳ層）

第５類土器＝阿玉台式土器／５・６Ｆトレンチ暗赤褐色土層（Ⅱ層）・混貝土層（Ⅲ層）・混土貝層（Ⅳ層）

(2) 石　　器

種類および点数は、打製石斧＝16、磨石＝１、剥片石器＝１、石錘＝３、その他＝１、計22点である。（０ＡＢトレンチ内からの出土は全くなく、５・６ＦトレンチおよびＧＳトレンチに限られる。）

打製石斧（図版７――**239～246**）

出土例数16例。うち完形品は10例で、他の６例は刃部および基部の一部を欠く。器体の形状は短冊形、長楕円形、撥形を呈するものがある。短冊形は長さが８cm前後で、他に比べ幾分小型の傾向を示す。大部分は両面と側面を敲打し、刃部の作り出しや整形を行なっているが、片面および両面の一部に自然面を残す例（**242・245・246**）もある。**243**は片側面に自然面を残し、礫器に似た形状を呈する。素材は硬砂岩が多く、ほかに粘板岩、珪質砂岩、石英砂岩、ホルンフェルス等が用いられている。５・６Ｆトレンチ暗赤褐色土層（Ⅱ層）・混貝土層（Ⅲ層）、ＧＳトレンチ混貝土層（Ⅲ層）から出土した。所属の時期については明確な判定がし難いが、検出土器の量から考慮すると、多くは中期に属するものと思われる。

磨石（図版７　**247**）

出土例数１例。破片であるが平面楕円形になると思われる。現存長は長径9.5cm、短径5.9cm、

厚さ3.3㎝を計り、中央部で最も厚さを増す形態をとる。両平面はよく研磨され、側面は面取りされている。側面の一辺は敲打による磨滅の痕跡が明瞭に残っている。素材は凝灰角礫岩を用いる。５・６Ｆトレンチ暗赤褐色土層（Ⅱ層）出土である。

剥片石器（図版７　—**248**）

出土例数１例。礫の一端を打ち落として製作した剥片状の石器である。長径6.7㎝、短径4.4㎝、厚さ1.5㎝と小型で薄い。剥片は一撃によって剥ぎ取られたと思われ、片面はその際に生じたバルブの痕跡だけが残る。他の一面は一部を加工するが、刃部になるところは自然面を残している。このまま刃器として使用できないこともないと思われるが、使用痕の不明瞭さや形態的な様子からは、製作途上の石器と考えるべきかもしれない。細粒凝灰岩製で、ＧＳトレンチの混貝土層（Ⅲ層）より出土している。

石錘（図版７—　**249・250**）

出土例数３例。扁平な円礫の両側面を一部打ち欠いて糸掛けにした石器。いずれも縦長の形状を呈し、長径と短径の比はおよそ３：２になる。糸掛けの打ち欠きは両面から粗く行なわれている。**249**は長径7.4㎝、短径4.6㎝、厚さ1.6㎝の楕円形を呈し、粘板岩を用いている。**250**は長径9.1㎝、短径7.4㎝、厚さ2.4㎝と大型で不正円形を呈し、硬砂岩を用いている。他の１例もやはり不正円形で、玄武岩製である。出土層位は５・６Ｆトレンチの暗赤褐色土層（Ⅱ層）と混貝土層（Ⅲ層）である。

他に剥片状の石器が１例ある。両面を加工しているが、片面の一部に自然面を残している。刃部を大きく欠損しているため、本来の形状を推測し難いが、形態的な特徴から、剥片石器あるいは小型打製石斧と言えようか。素材は珪質頁岩である。ＧＳトレンチ混貝土層（Ⅲ層）から出土した。黒耀石片は５・６ＦトレンチとＧＳトレンチの表土から出土した４片である。いずれも１㎝前後のもので、使用痕等はない。スクラップと認められる。

(3)　土　製　品

土錘（図版７—　**251・252**）

出土例数２例。縄文式土器の破片を利用したもの。**251**は連続爪形文とこれに平行する押引文を施した胴部破片を用いる。長径6.8㎝、短径5.7㎝、厚さ1.4㎝の横長の形状をし、周囲は粗く整形が行なわれ、２ヵ所の糸掛け部は磨滅痕が顕著である。色調は暗褐色を呈する。**252**は複節斜行縄文を施した胴部破片を用いる。現存長は長径5.7㎝、短径5.4㎝、厚さ1.3㎝で、短径の一部が欠損している。周囲の整形は打ち落とす程度の粗雑なものである。糸掛けは３ヵ所に顕著に認められるが、欠損部にも存在し、対称位置に４ヵ所あったことが考えられる。色調は赤褐色を呈する。両例とも胎土中に砂粒や石英粒を含み、勝坂式土器に比定される破片を用いている。５・６Ｆトレンチの混貝土層（Ⅲ層）より出土した。

(4) 貝 製 品

貝刃（図版7　253・254）

出土例数2例。ハマグリの腹縁に、殻の内面側から押圧剝離により鋸歯状の刃を付けたもの。253は長径6.9cm、短径5.5cm、高さ2.0cmになり、左殻を用いている。刃は腹縁の中央に幅広く付く。押圧剝離は2回行なわれ、1次剝離は左から右の方向へ剝離幅を次第に狭くして行ない、2次剝離は右から左へ小刻みに行なっている。254は前者より小型で、長径5.9cm、短径4.9cm、高さ1.4cmになり、右殻を用いている。刃は腹縁の中央より左寄りに付く。押圧剝離は1次加工のみで、左から右へ粗雑に行なっている。両例とも、刃先には顕著な使用痕が認められるが、損耗の度合はさほどでもなく、比較的軟らかいものを対象にした刃器であったかと思われる。0ABトレンチ出土の人工遺物は本例に限られており、混貝土層（Ⅱ層）中から諸磯b式土器に伴出した。

Ⅲ. 調査所見

第2次発掘調査の結果概要を以上に述べた。本調査は、台地東斜面褶状部分の上半に中心をもつ前期貝塚と、その下方においてそれと重複存在する中期貝塚の範囲確認を主目的に実施した。しかし、発掘可能地点の制約により、十分目的を達せたとは言い難いが、一応次の諸点が判明または確認出来たので、箇条書きして結語に代えたい。

1. 前期貝塚の明確な末端は不明であるが、0ABトレンチの混土貝層堆積状態からみて、北端はS区内にある可能性が大で、当初の予想より若干広がると考えられる。
2. 前期貝塚は、台地上縁が削平されたさい一部消滅したと推定されるが、4区・5区のAB付近および5・6Fトレンチとその周辺では貝層が全く認められないので、この付近に南端が存在すると考えられよう。
3. 中期貝塚は5・6Fトレンチでは、2AB・2DEトレンチ、特に2DEトレンチと同じく、斜面下方の小平坦面から褶状凹所に向かって堆積、小平坦面以東において急激に厚く堆積することが判明した。貝層の南縁は5F区・6F区の境界付近と見做される。また、貝層はトレンチ西壁に現われた貝層の状態から、おそらく西壁上方4～5m程度から始まる可能性が多い。
4. 第2次調査における層の名称は、第1次調査の各トレンチと距離があるため、後者とは一致しない。しかし、地形、貝層・土層の堆積状態、出土土器型式等を総合すると、それらは二次堆積と考えられるGSトレンチを除き、次のような関係にあると考えられる。

(1) 0ABトレンチ　Ⅰ層（表土）＝2AB・2DEトレンチⅠ層
Ⅱ層（混貝土層）＝同上、Ⅱb層
Ⅲ層（混土貝層）＝同上、Ⅲb層

Ⅳ層(暗褐色土層)＝同上、Ⅵ層

Ⅴ層(関東ローム層)＝同上、Ⅶ層

(2) 5・6Fトレンチ　Ⅲ層(混土貝層)＝2DEトレンチⅣa層

Ⅳ層(混土貝層)＝同上、Ⅴ層

以上4項では、ごく大雑把にまとめたが、詳細については第1次調査、第2次調査の結果を更に検討し、機会をみて報告する予定である。

稿を終えるに当り、本調査について格別のご配慮を賜わった熊野神社宮司石川正人氏、困難な発掘作業にもかかわらず熱心に協力して下さった、横山昭一、矢野真一両氏および明治学院大学考古学研究会の諸氏、ならびに石質鑑定に協力頂いた本館専門学芸員松島義章氏に対し厚くお礼を申し上げる。

表1．第2次調査発掘地域出土貝類

トレンチ別		0ABトレンチ	5・6Fトレンチ
種名 ＼ 層位		混土貝層 Ⅲ	混土貝層 Ⅳ
二枚貝	ハイガイ	++	+
	サルボウ	+	++
	ハマグリ	-+	++
	アサリ	+	—
	シオフキ	+	——
	オキシジミ	++	++
	カガミガイ	+	(+)
	ミルクイ	+	+
	カリガネエガイ	-	(+)
	マガキ	+	+
	イタボガキ	(-)	(+)
巻貝	アカニシ	-	++
	イボニシ	+	+
	ツメタガイ	+	++
	スガイ	+	+
	イボキシャゴ	+	+
	ウミニナ	+	+

注　1．層位欄の時計数字はトレンチ壁面実測図の記号に同じ。
2．出土量の表示は次のとおりである。
++＝出土多。+＝出土。(+)＝出土少。——＝出土無。
※　本表は混土貝層中に含まれた種類と出土量の傾向を示すに止めたものである。貝類の構成比率、個人の成育度別等の分析は将来、別稿で報告する予定である。

表2. 第2次調査トレンチ別遺物出土表 (土器を除く)

OAB トレンチ

遺物＼層	表土層 I	混貝土層 II	混土貝層 III	暗褐色土層 IV	関東ローム層 V	小計	合計
貝刃	0	2	0	0	0	2	2

5・6F トレンチ

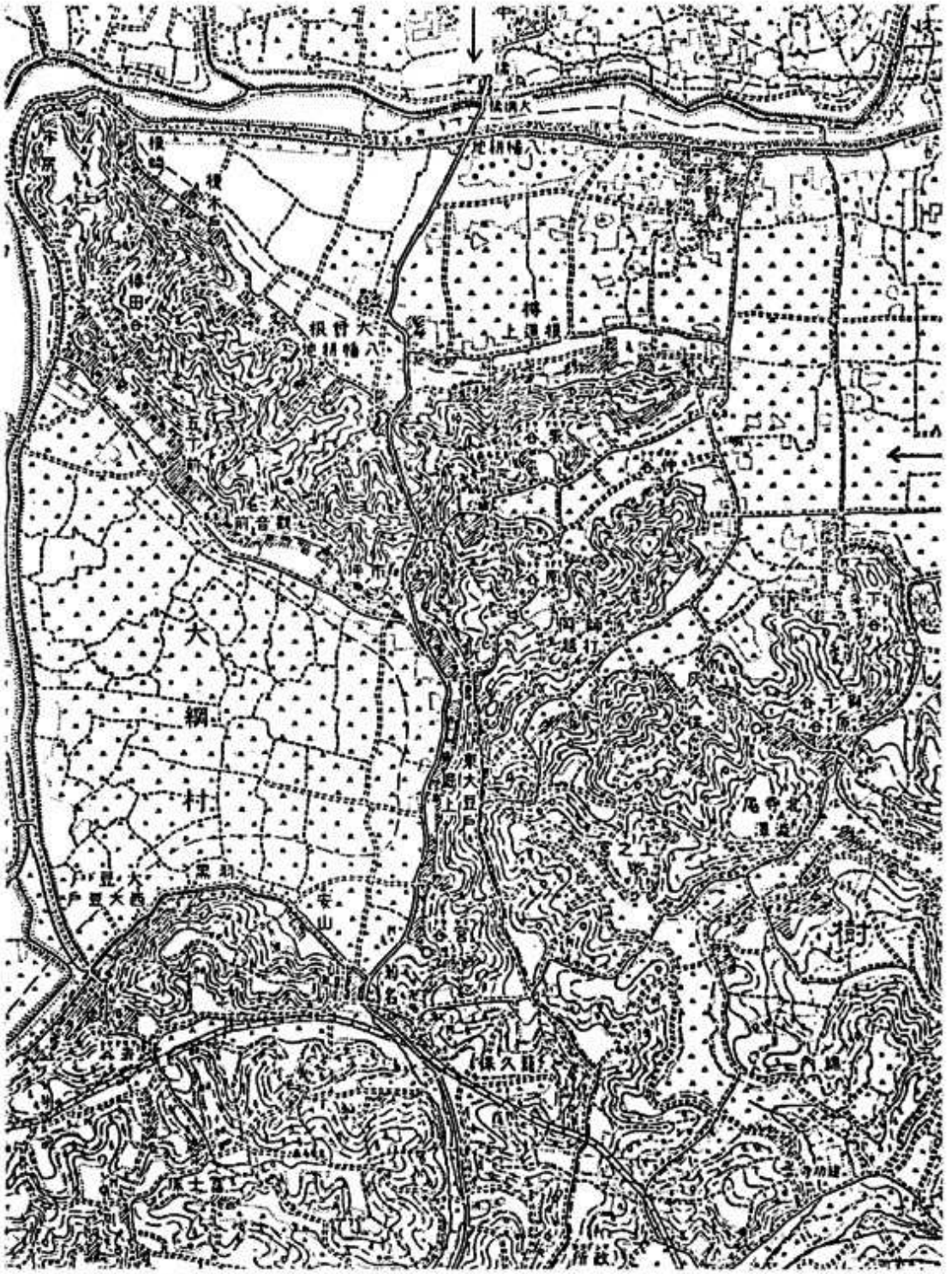
遺物＼層	表土層 I	暗赤褐色土層 II	混貝土層 III	混土貝層 IV	小計	合計
打製石斧	0	5	7	0	12	18
石錘	0	2	1	0	3	
磨石	0	1	0	0	1	
土錘 (土器破片利用)	0	0	2	0	2	

GS トレンチ

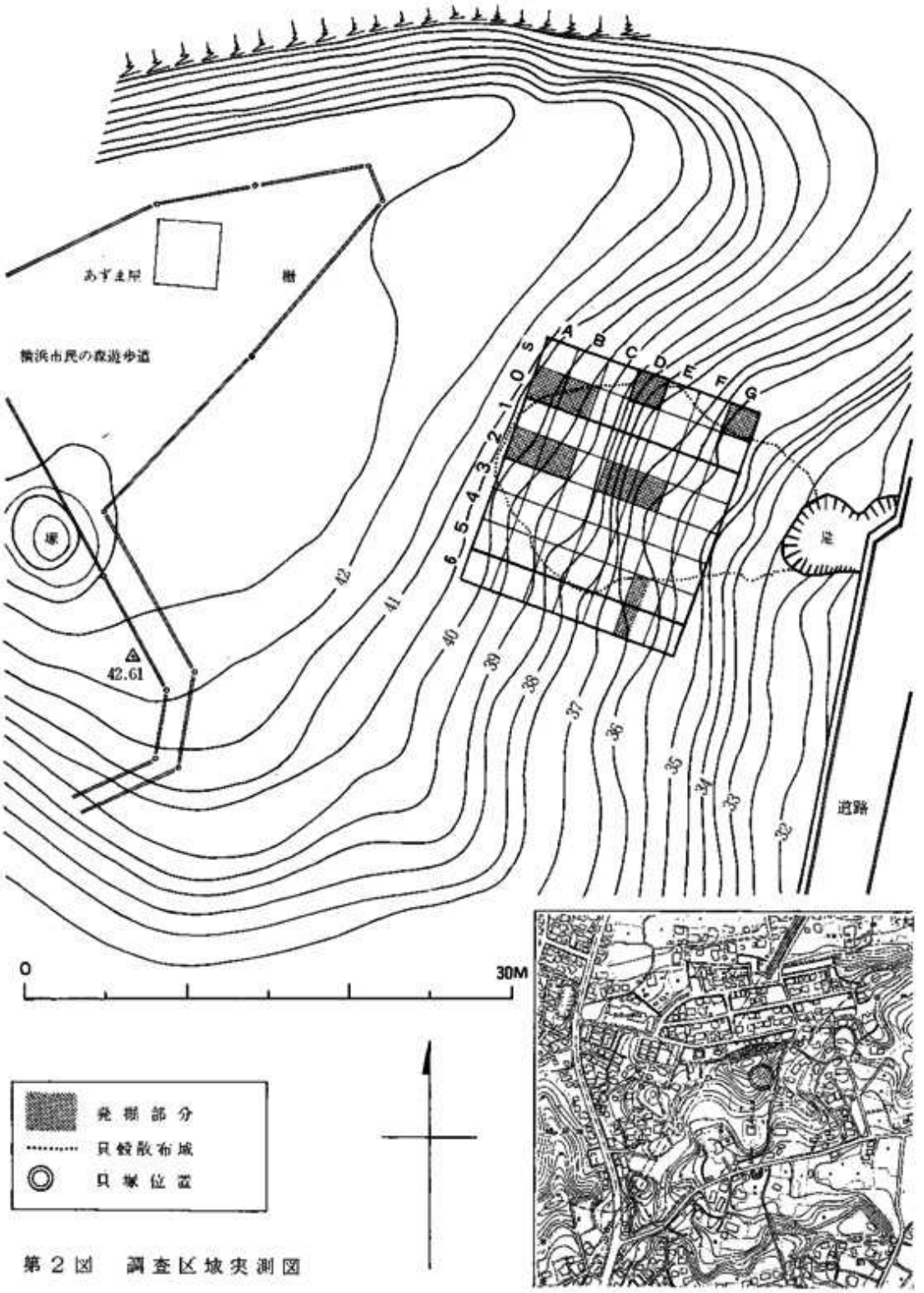
遺物＼層	表土層 I	混土貝層 II	混貝土層 III	———	小計	合計
打製石斧 (破片含む)	0	0	3		3	5
剥片石器	0	0	1	———	1	
石器破片	0	0	1	———	1	

排土

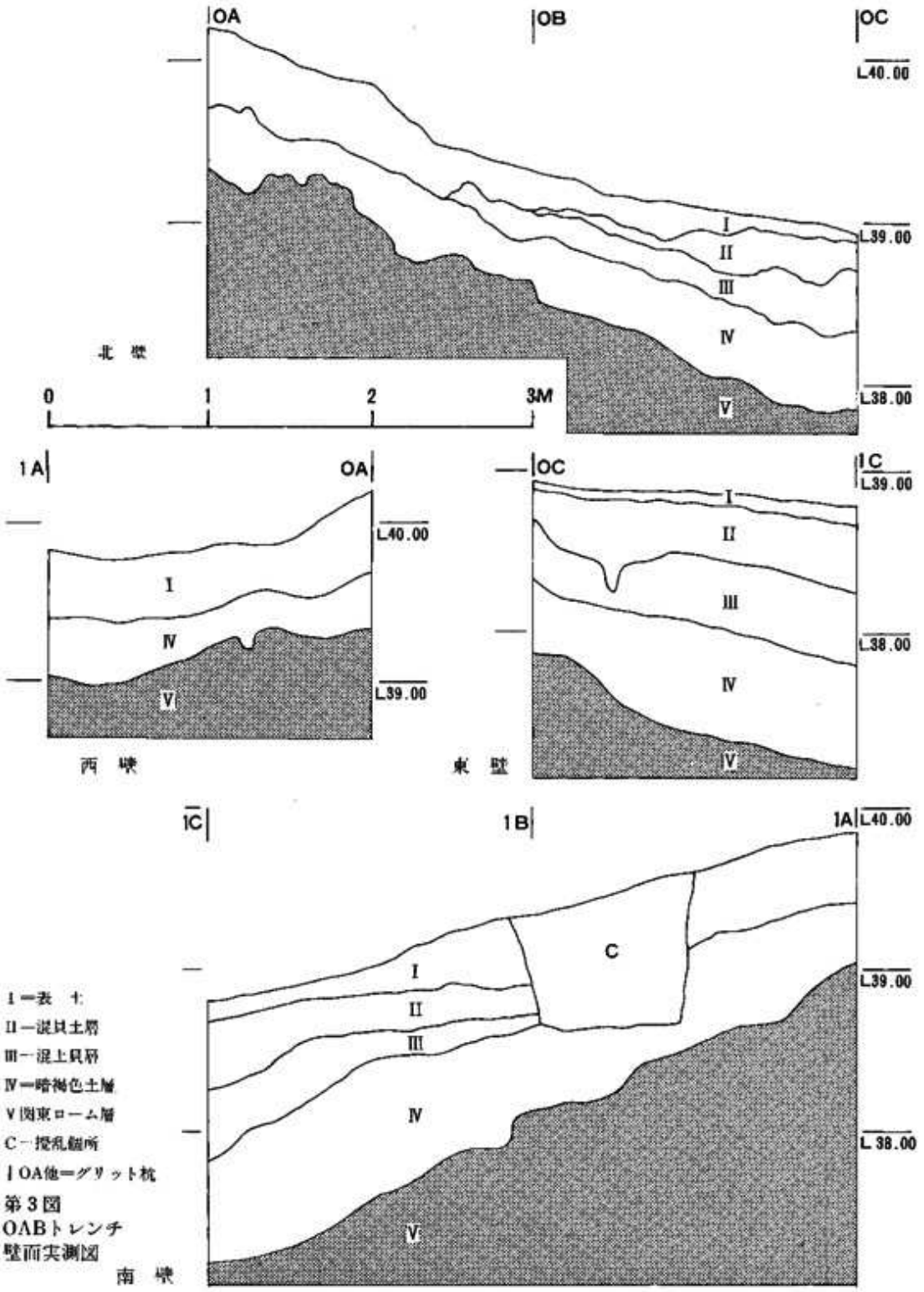
遺物＼層	5・6FトレンチまたはGSトレンチ排土	小計	合計
打製石斧	1	1	1



第1図　鰊岡貝塚所在地点および周辺旧地形図
(大日本帝国陸地測量部20,000分の1地形図・明治41年版)

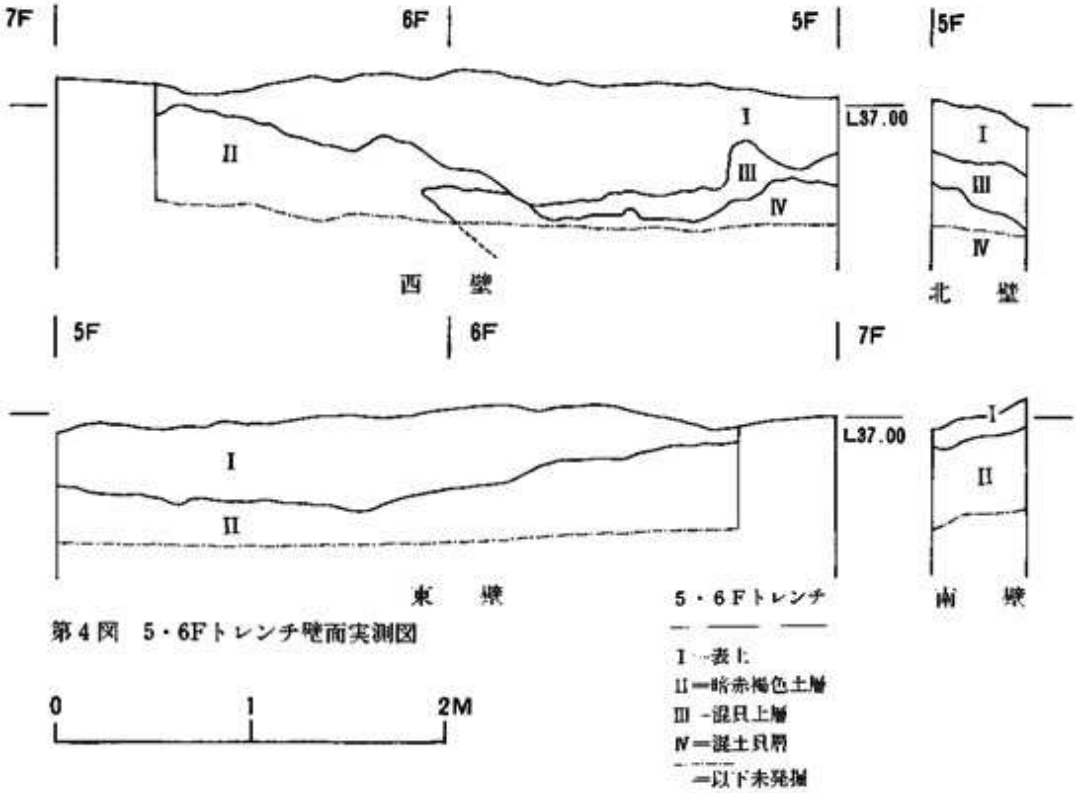

あずま屋
樹
横浜市民の森遊歩道
塚
42.61
A
B
C
D
E
F
G
1
2
3
4
5
6
42
41
40
39
38
37
36
35
34
33
32
道路
0
30M
発掘部分
貝塚散布域
貝塚位置

第２図　調査区域実測図

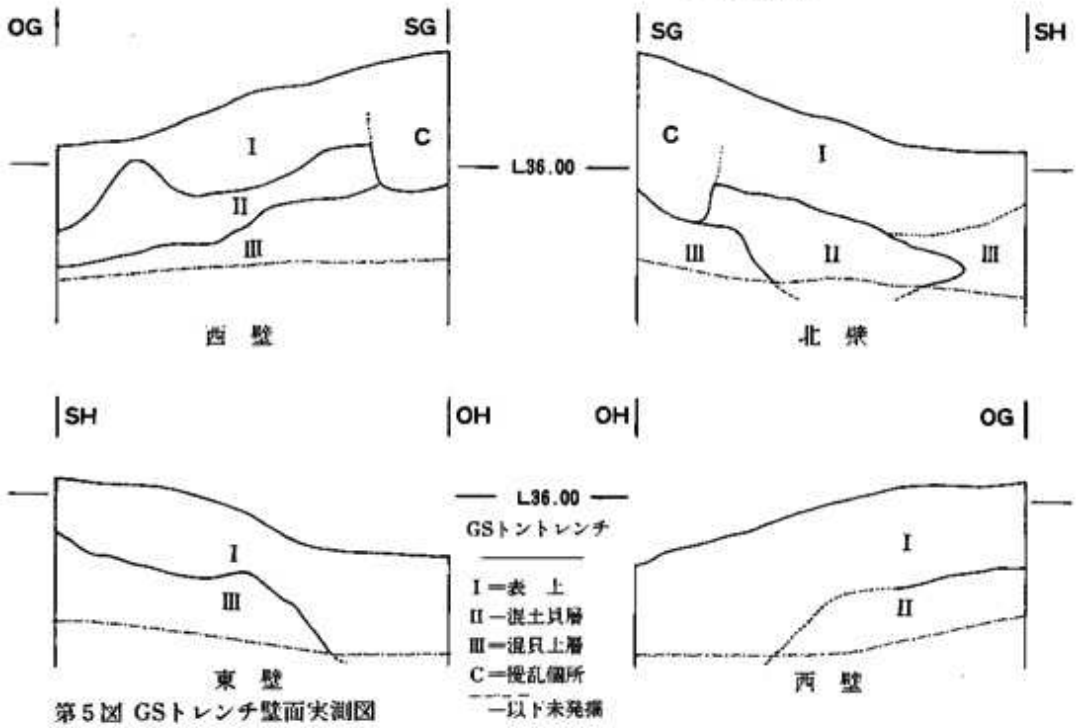


I ―表 土
II―混貝土層
III―混土貝層
IV―暗褐色土層
V 関東ローム層
C―撹乱範所
1 OA他―グリット杭

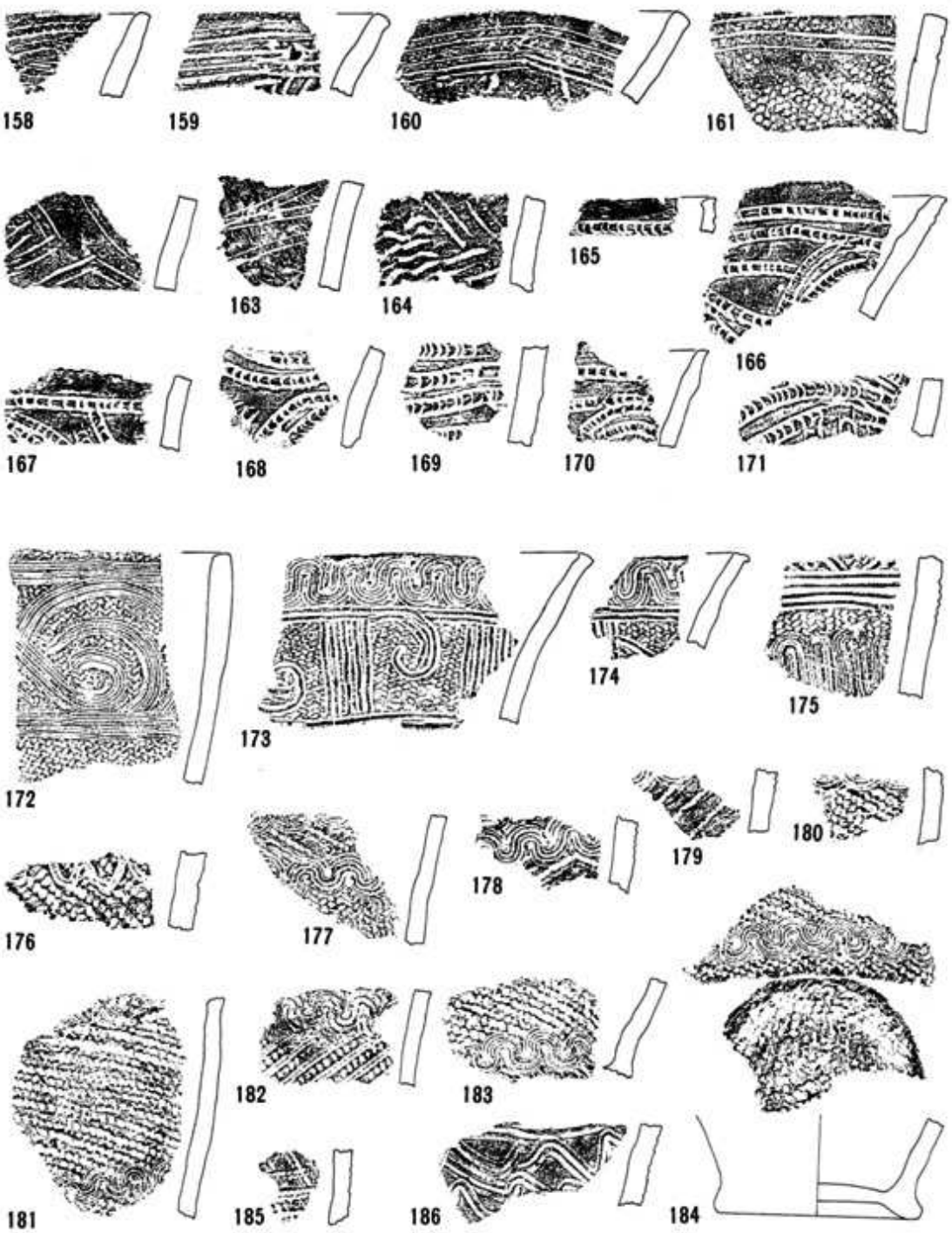
第3図
OABトレンチ
壁面実測図



第4図　5・6Fトレンチ壁面実測図



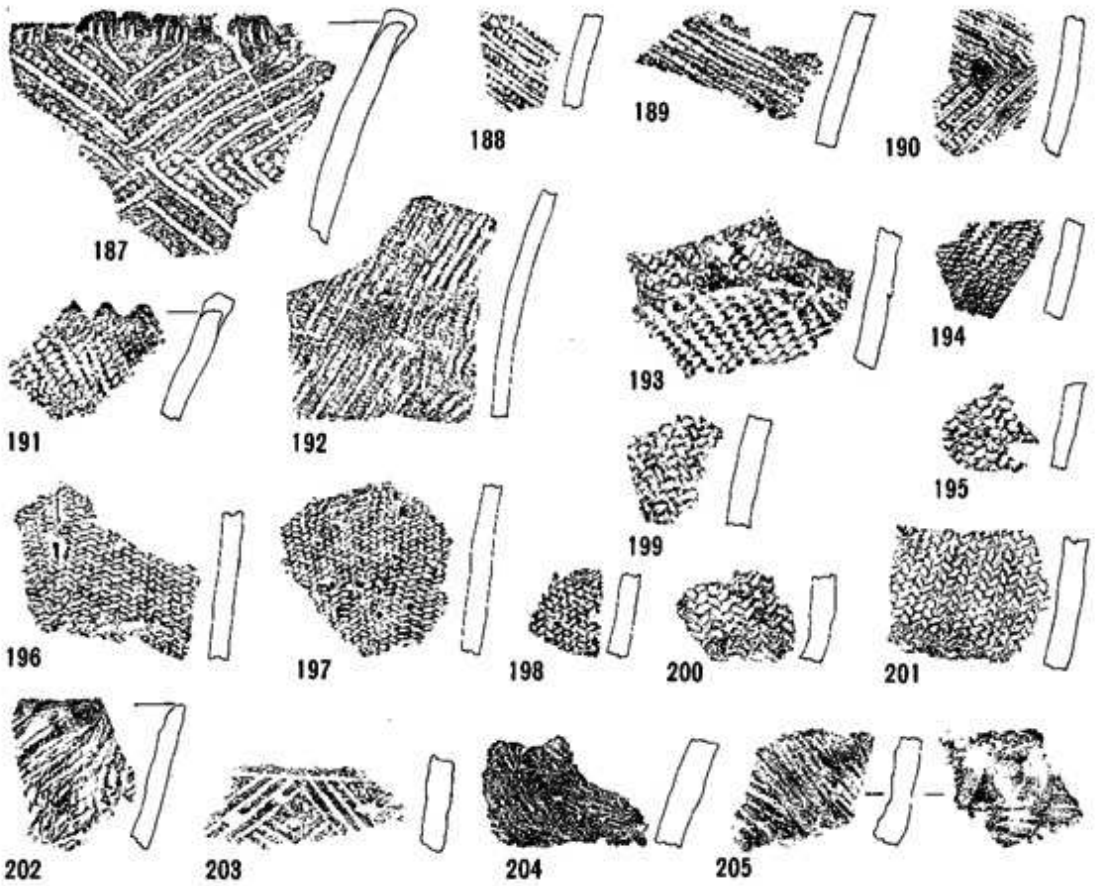
第5図 GSトレンチ壁面実測図

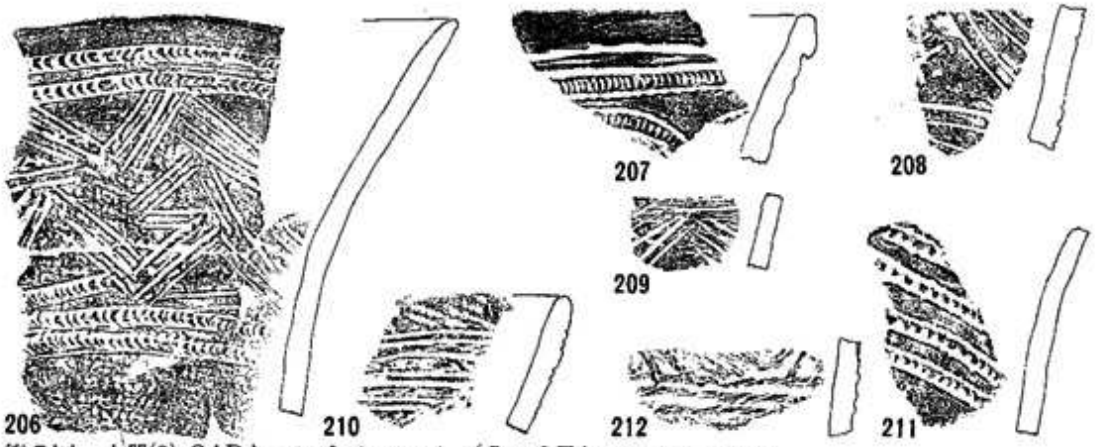


第6図　土器(1) OABトレンチ（158～186）

出土層位　I層＝158・160．II層＝159・161・163・164・181・186．III層＝162・165～171．172～180・182～185．

(縮尺1：3)〔類　別〕　第1類土器＝158～171．第2類土器＝172～186．





第7図　土器(2) OABトレンチ（187~205）／5・6Fトレンチ（206~212）

OABトレンチ…出土層位　III層―195・202・204. IV層―187~194・196~201・203・205.

〔類　別〕第2類土器―187~204.　第3類土器―205.

5・6Fトレンチ…出土層位　II層―206・207・210. III層―212.　IV層―208・209・211.

〔類　別〕第1類土器―206~212.

(縮尺1：3)

(1) OABトレンチ北壁断面

(2) OABトレンチB区東壁・南壁断面

(1) OABトレンチ混土貝層 (B区東壁純貝層状部分)

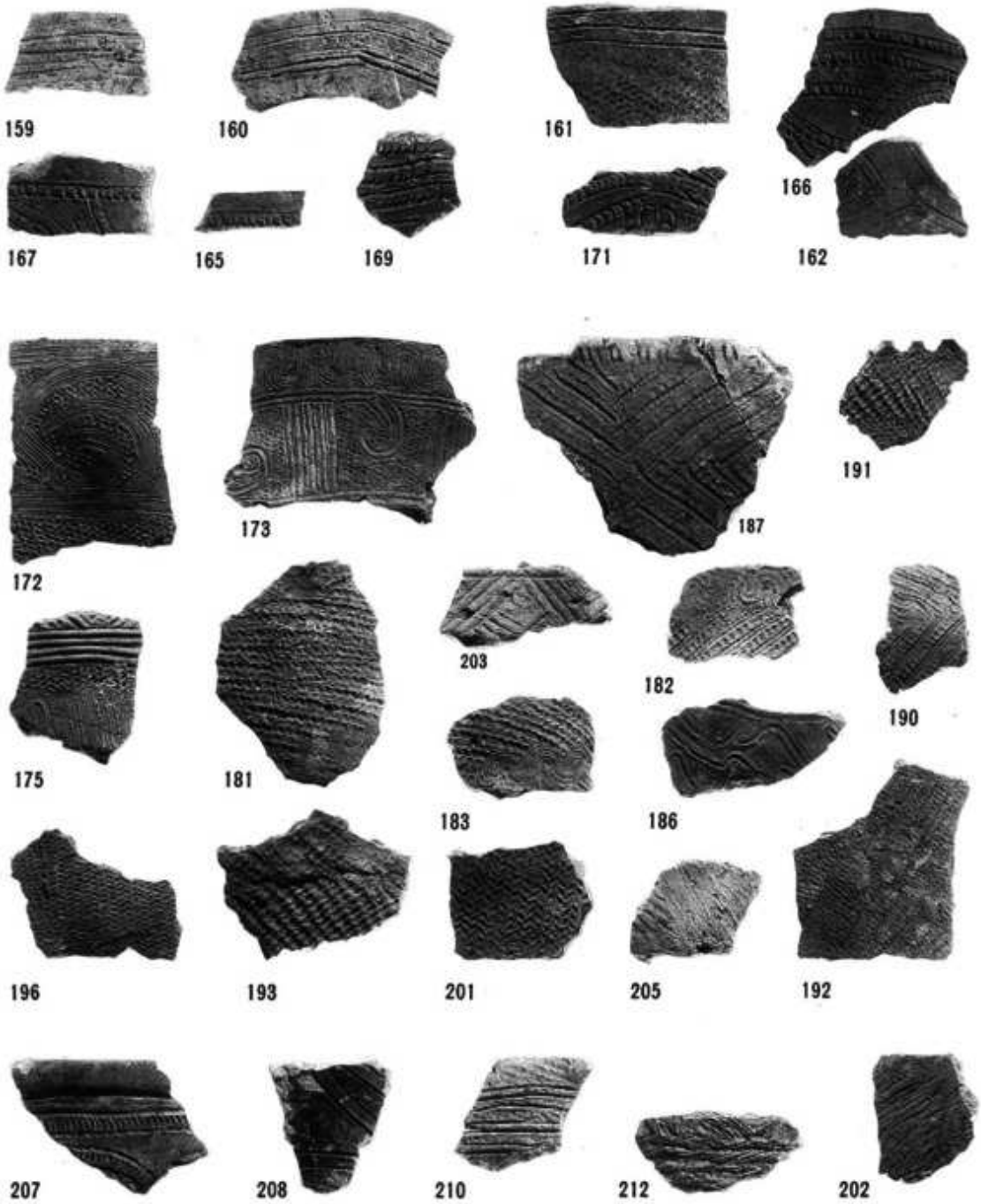
(2) GSトレンチ西壁・北壁断面

（1） 5・6Fトレンチ西壁断面

（2） 5・6Fトレンチ北壁断面

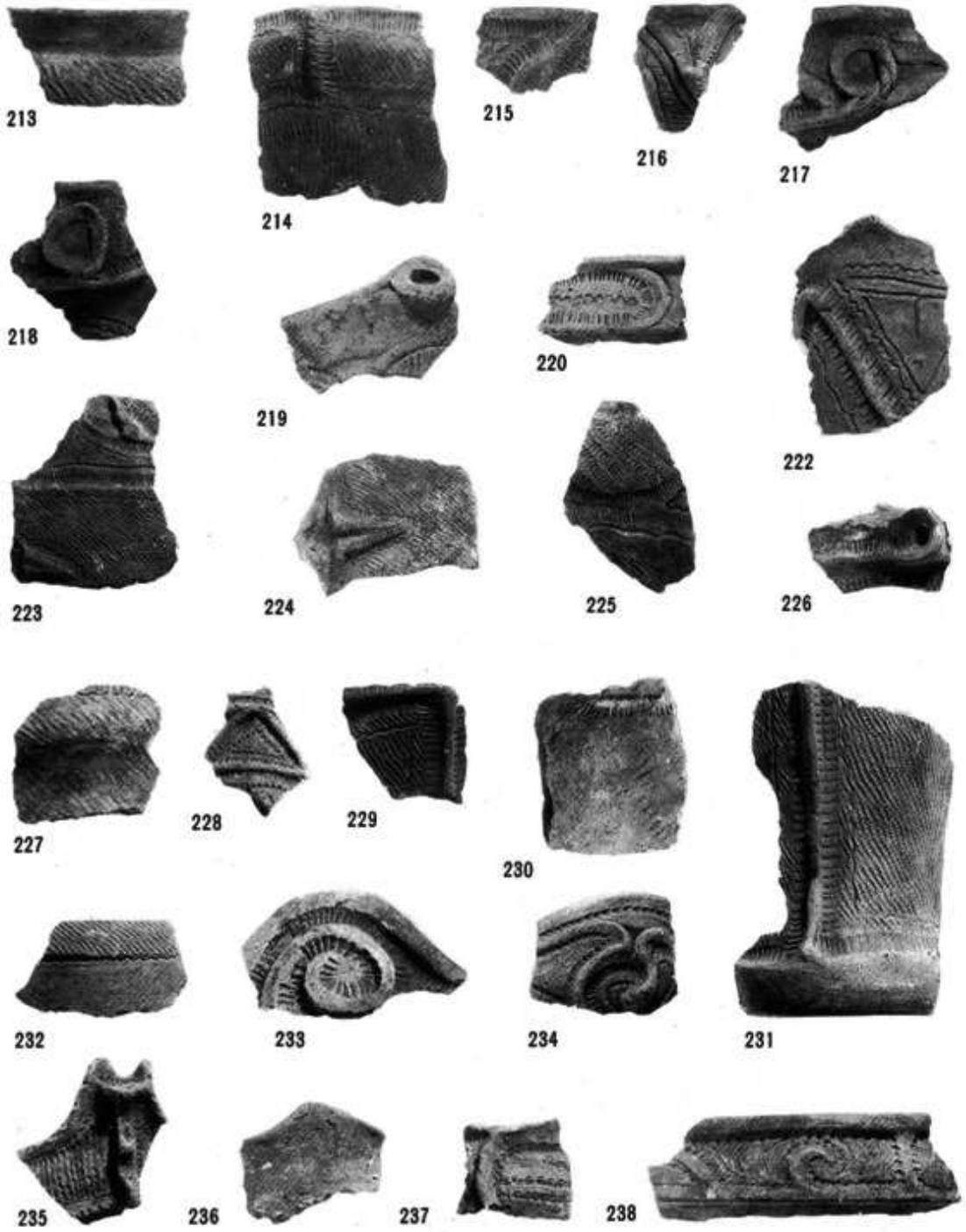
（1）５・６Ｆトレンチ出土
第４類土器（221）
Ｈ＝26.5cm

（2）同出土状態

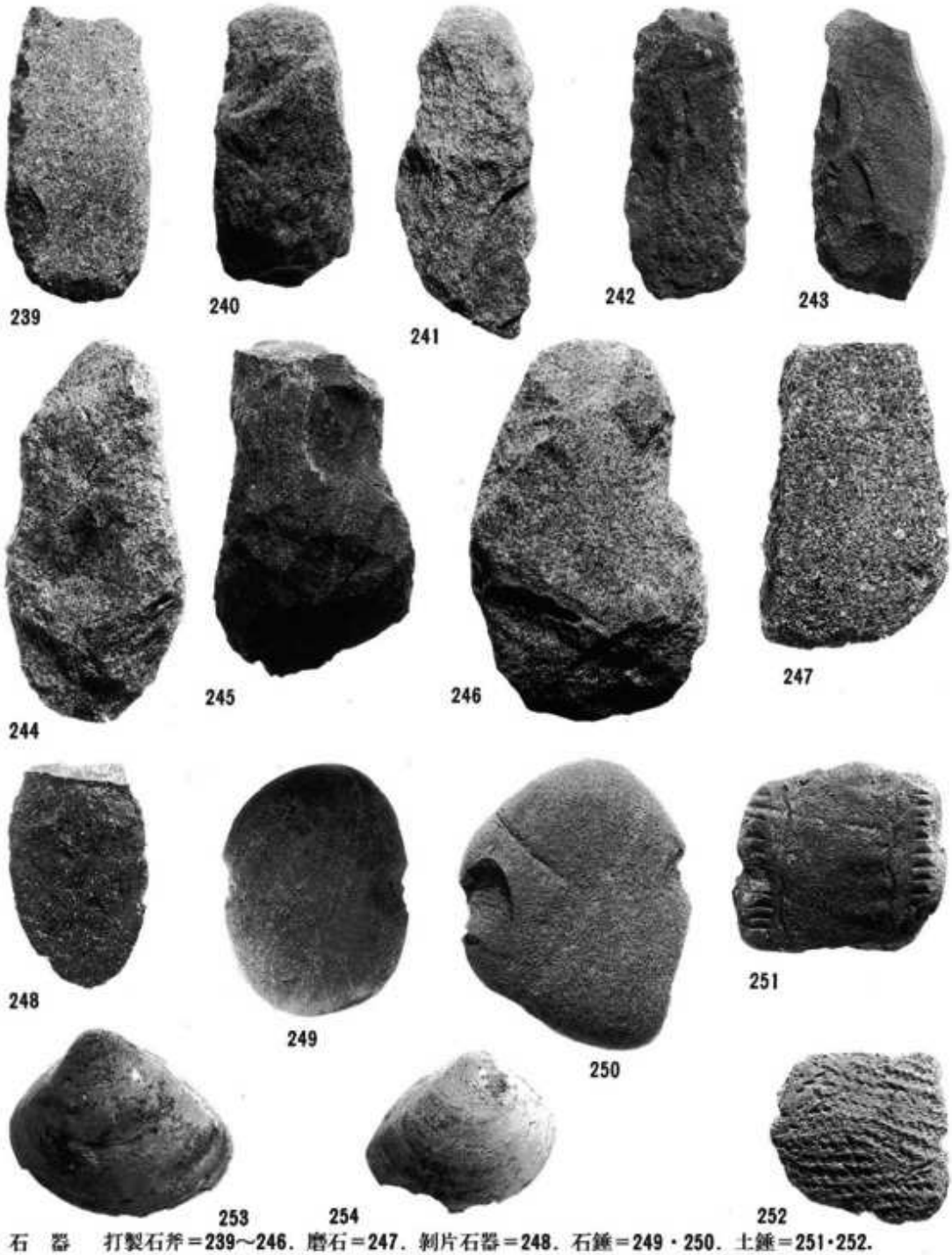


土器(1)　OABトレンチ出土土器159～205（一部欠番）
出土層位　Ⅰ層―160．Ⅱ層―159・161・186．Ⅲ層―162・165～167・169・171．
Ⅳ層―172・173・175・181～183・187・190～193・196・201～203・205．

5・6Fトレンチ出土土器　207～212　（1部欠番）
出土層位　Ⅱ層―207・210．Ⅲ層―212．
〔類　別〕第1類土器―159～172・207・208・210・212．第2類土器―172～202．
縮尺約1：3　第3類土器―205．



土器(2)　5・6Fトレンチ出土土器 213～238(一部欠番)
出土層位　II層＝214～218・222・226～231・235・236・238. III層＝213・219・220・232～234・237. IV層＝223～225.
縮尺約1：4　〔類別〕第4類土器＝213～231. 第5類土器＝232～238.



石　器　打製石斧＝239～246．磨石＝247．剥片石器＝248．石錘＝249・250．土錘＝251・252．
土製品　貝刃＝253・254．
貝製品　出土トレンチ・層位　ＯＡＢⅡ層＝253・254．ＧＳⅢ層＝246・247．
5・6ＦⅡ層＝247・250．5・6ＦⅢ層＝239～241・243～245・249・251・252．
縮尺1：2　5・6Ｆ排土＝242．

神奈川県立博物館発掘調査報告書
第 15 号

昭和58年 3 月25日 印 刷
昭和58年 3 月31日 発 行

編集兼発行者 神 奈 川 県 立 博 物 館
館長 田 中 雅 夫
横浜市中区南仲通り 5 —60

印 刷 所 東 邦 印 刷 株 式 会 社
横浜市南区高根町 3 —18